

多国籍企業のダイナミックケイパビリティと 持続可能な開発及び繁栄

永島暢太郎

Dynamic Capability of Multinational Corporations,
Sustainable Development and Prosperity

Nobutaro NAGASHIMA

Abstract

This paper investigates changes in the strategic management of innovation among multinational corporations from the viewpoint of the dynamic capability of US business management. In particular, it considers the research of John Cantwell on innovation management in companies that are operating in emerging markets. Furthermore, the integrated viewpoints of global strategic management in the fields of economic geography, innovation and strategic management that are giving rise to new trends in research are of interest. The dynamic capability of multinational corporations is the driver that these corporations need to achieve regional sustainable development in emerging markets. Simultaneously, this can be explained as the balanced ability of corporations to achieve regional sustainable prosperity in advanced market countries. Dynamic capability is gaining practical significance in today's world where new innovations that are based on entrepreneurship are created in complex domains through global connectedness among regional clusters.

In Section II, we note the major change in US business management towards complex problem solving. Furthermore, we demonstrate that the current changes in the field of international business studies are the result of a process whereby the strategic management of innovation focusses on dynamic capability.

In Section III, we consider the research of John Cantwell et al. on innovation management in corporations that are operating in emerging markets. This research incorporates viewpoints on dynamic capability and open innovation, which take multinational corporations in new directions. Furthermore, we consider the development

of new viewpoints that integrate the areas of economic geography, strategic management and innovation.

In Section IV, from among these integrated viewpoints we focus on research related to global connectedness and innovation clusters. Moreover, we discuss the idea regarding designing corporations' global strategies in terms of controlling the balance between sustainable development in emerging markets and sustainable prosperity in advanced markets. In Section V, we state our conclusions and suggest directions for conducting future research.

目次

- I. はじめに
- II. ダイナミックケイパビリティの新たな潮流と方向性
 - (1) 米国経営学とダイナミックケイパビリティ
 - (2) 国際経営論へのイノベーションの戦略経営論の浸透
- III. 多国籍企業のダイナミックケイパビリティとオープンイノベーション
 - ー J. カントウェル他の研究における企業の内部から地域のクラスターへの焦点の移行ー
 - (1) 新興国の後発企業による産業上のリーダーへのキャッチアップ戦略
 - (2) 多国籍企業におけるオープンイノベーションシステムへの移行
 - (3) 経済地理, 戦略経営, イノベーションの分野の統合的視座
- IV. 新興国市場の持続可能な開発, 先進国市場の持続可能な繁栄, グローバルな結合性
 - (1) イノベーションのクラスター (cluster of innovation) の考え方を中心にして
 - (2) 企業のグローバル戦略経営への実践的な含意
- V. むすびにかえて

I. はじめに

本稿は、米国経営学のダイナミックケイパビリティの視点から、多国籍企業のイノベーションの戦略経営の変化について考察することを目的としている。そのために、J. カントウェルなどの新興国市場の企業によるイノベーション経営の研究に関して考察を行い、最近の研究の潮流として生成している、経済地理、戦略経営、イノベーションの分野の統合的な視座について、グローバル戦略経営の視点から検討する。多国籍企業のダイナミックケイパビリティは、新興国市場の地域の持続可能な開発を実現する上で必要となる企業の駆動的な能力を説明すると同時に、先進国市場における地域の持続可能な繁栄を実現する企業の均衡的な能力について説明できると考えられる。ダイナミックケイパビリティは、企業家精神に基づく地域のクラスター間でのグローバルな結合性を通じて、複合的な領域において新たなイノベーションが生成する今日、実践的な意義を増大させている。

第Ⅱ章では、米国経営学が複合的な問題解決を指向して大きく変化しており、国際経営論の分野で現在生じている変化とは、ダイナミックケイパビリティの概念を中心にしながらイノベーションの戦略経営論が浸透する過程であることを示す。

第Ⅲ章では、多国籍企業論にダイナミックケイパビリティとオープンイノベーションの視点を組み入れて新たな展開を示している J. カントウェル他による新興国市場の後発企業のイノベーション経営に関する研究について考察を行う。その上で、彼らが発展させつつある経済地理、戦略経営、イノベーションの分野を統合化する新しい視座について考察する。

第Ⅳ章では、統合的な視座の中でも、グローバルな結合性とイノベーションのクラスターに関する研究に焦点を当てて考察を行い、新興国市場の持続可能な開発と先進国市場の持続可能な繁栄のバランスを制御するような企業のグローバル戦略を設計する考え方について論じる。第Ⅴ章では結論として、本稿の総括を行い、今後の研究の方向性を示す。

Ⅱ. ダイナミックケイパビリティの新たな潮流と方向性

(1) 米国経営学とダイナミックケイパビリティ

本章では、国際経営及び企業のイノベーションの戦略経営の変化に関して、米国経営学の主流にあるダイナミックケイパビリティの視点から考察を行うことにする。米国経営学会、Academy of Management (AOM) の年次大会に関する過去数年間のテーマの特徴として、経済の持続可能な開発の探求を背景にしながら、地球的な視野に基づき境界を越えたイノベーションを扱う傾向を挙げることができる。この数年間のテーマの傾向を以下に示す¹⁾。

例えば、米国のフィラデルフィアで2014年に開催された Academy of Management では、Power of Words を統一テーマに、国境、地域、組織など様々な次元の境界を越えた“言葉の力”に基づく対話及び知識創造に関連する報告が多数行われている。企業での海外からの移住者の活躍、女性を含むマイノリティの管理職位への登用などによる多様性の管理について強調され、新しいリーダーシップの在り方を含めた経営組織の様々なイノベーションが扱われている。そこでは組織の能力をダイナミックに再構成するメタ能力が問われており、ダイナミックケイパビリティの考え方は拡張され、普遍性を示している。他方でこの分野での研究は、現在でも模索の段階にあり、専門分野を越えた複合的な研究アプローチを探索する傾向を観察することができる。

また2013年にオーランドで開催された AOM の統一テーマ、Capitalism in Question は、アジア新興国市場の発展などを通じて体制の間での境界が曖昧になり、国家及び経済体制

よりも地域の多様性に焦点が向けられる“資本主義の疑問”の時代を象徴している。2012年にボストンにおいて開催されたAOMの統一テーマ、Informal Economyは、地球規模での“非公式経済”と公式経済の境界を越えたイノベーションを示唆するものであった。2015年にカナダのバンクーバーで開催のAOMでは、Opening Governanceが統一テーマとして掲げられ、クラウドソーシング、ビッグデータを始めとするICTの時代が到来する中で、“組織境界を越えたパートナーシップと共同によるイノベーション”が、急速に本格化していることを示している。カリフォルニア大学のH. チェスブロー教授が2003年に提唱したオープンイノベーションの考え方は、クラウド技術の進化に合わせて、サイエンスの様々な次元において実現化している。

イノベーションの戦略経営論の国際経営論への浸透の過程を考える上で、このような境界を越えたイノベーションの動きは、本質的に重要であると考えられる。本稿でも取り上げるテンプル大学のR. ムダンビ教授は、「知識の活用と空間を越えた能力は、国際経営の次のフロンティアであり、多国籍企業とは、その子会社が、地域的な文脈の多様性に埋め込まれたノードとして機能するネットワーク化された企業である。多国籍企業は、多くの地域的なイノベーションシステムに関係することが可能になり、その結果として、多様な知識基盤に接近し、それらを統合して新しい能力を創造することが可能になる²⁾。・・・また個人の創造性を生かす一方、モニタリングを最小化し、内在的動機付けを生み出すための組織アーキテクチャーの設計は、MNEの競争優位性の重要な要素になる³⁾」と論じている。

R. ムダンビは、米国へのディアスポラの一人であり、企業のイノベーション経営、戦略経営、国際経営、企業家精神と地域のクラスターなど、相互浸透的な複合領域で活発な研究を行っている。アジア新興国市場の一角を占めるインドの企業によるグローバルイノベーションを分析対象とした上で、欧米の先端的な企業との間で比較分析することにより、イノベーションのグローバル化がダイナミックに進化するメカニズムを探索している。彼は、移行期のインド経済における企業の戦略経営に関する研究を行っており、先進国市場の企業におけるイノベーション経営との差異化及び収斂化を解明しようとしている。

(2) 国際経営論へのイノベーションの戦略経営論の浸透

国際経営論の分野で、現在生じている変化は、イノベーションの戦略経営論が浸透する過程であり、ダイナミックケイバリティ及び境界を越えたイノベーション（オープンイノベーション）の潮流に焦点が向けられたものである。この傾向は、過去の研究を見れば、A.D. チャンドラ 他 編 The Dynamic Firm -The Role of Technology, Strategy,

Organization, and Regions, 1999⁴⁾ に象徴されるように、ダイナミックケイパビリティの理論が生成した時期に存在していたと理解できる。

A. チャンドラーによる序文で始まる前掲書は、第1部：企業における技術、第2部：戦略／組織、第3部：地域 という構成になっている。企業の長期の競争優位性に関する基礎理論として、ダイナミックな企業行動の理論について模索されており、これが現在のダイナミックケイパビリティの研究の展開に繋がっている⁵⁾。前掲書では、ダイナミックケイパビリティの系譜に連なる Y. ドーズ、R. ネルソン、V. ヒッペル、野中郁次郎、藤本隆宏、などが各章を執筆しており、J. ダニング、M. ポーターなどの代表的な研究者が重要な章を執筆している。次章で取り上げる J. カントウェルは、技術のグローバル化について論じている。彼を中心に技術、戦略、地域のアイデアの統合を試みる新しい視座が生成しつつあり、これについては第IV章で論じることにする。

21世紀に入ると ICT の進化と普及を契機として、オープンイノベーションの潮流が本格化することになる。これは D. ティースとの共著論文の Organizing Innovation によって注目された H. チェスブローが、シリコンバレーでの ICT 企業によるイノベーション経営の事例研究を基にして発展させた新しいパラダイムであり、サイエンスビジネスを中心に企業での実践及びイノベーションに関する学術研究において世界的な広がりを見せている⁶⁾。この時期の多国籍企業は、チャンドラーモデルからポストチャンドラーモデルへの企業形態としての移行が想像を越える速度で進行することになった。

この問題に関しては、イノベーションの戦略経営論の分野を中心とする研究者が、A. チャンドラーの学説研究の D. ティース他編著 Management Innovation, 2012の中で、ダイナミックケイパビリティの観点から解明している。現在、ダイナミックケイパビリティの研究は、アメリカ経営学におけるイノベーションの戦略経営論の中心に位置しており、20世紀後半以降の日本と米国の経済発展の歴史を踏まえたオープンイノベーション、及び、日本企業の製品開発過程に基づく組織的知識創造のメカニズムを内包するダイナミックケイパビリティの観点は、アジア新興国市場の急速な発展を背景にして、日本企業のグローバル戦略経営を考える際に重要な視座を提供できると考えられる。

ダイナミックケイパビリティとオープンイノベーションが、連携的なパターンを描いて新たな進化を見せる背景には、米国の経営戦略論の分野で複合的なアプローチに依拠した研究の必要性が高まっていることが挙げられる。それにより、国内・グローバルの壁を越えた理論を形成できるためである。例えば、この分野の代表的なテキスト、Joe Tidd and John Bessant, Strategic Innovation Management 2014の内容に象徴されるように、ダイナミックケイパビリティの系譜には、イノベーションの戦略経営論に関連する複合的な方法論が含まれており、応用可能性及び発展可能性が高いと考えられている⁷⁾。ミシガン大学

の A. Afuah 教授が Business Model Innovation, 2014. で論じているように、世界に拡散して進化するビジネスモデルのイノベーションもまた、ケイパビリティを核としてシステムとしての模倣困難性を探究する傾向があり、この研究の潮流の重要性は高まりを見せている⁸⁾。

ダイナミックケイパビリティが、さらにオープンイノベーションと連携して発展する背景には、米国内で新産業を創出する駆動力が希求されていることが挙げられる。現在、米国の経営戦略論では、企業におけるイノベーションと競争優位性を中心に複合的な研究アプローチを求める傾向が強まっている。ダイナミックケイパビリティの概念を中心に置いて、ビジネスモデルイノベーション、プラットフォーム、顧客との相互作用などの様々な視点を含む多層的な研究を統合化する試みが活発化しており、全体の理解を包括する触媒的な役割を果たしている。D. ティースの論文にあるように、それは企業の複合的な文脈におけるイノベーションを考える際に有効である⁹⁾。

その背景には、先進国市場に本拠地のある企業が、グローバルな戦略経営を志向する現実が、益々進行しており、知的財産の戦略的管理が、駆動力として本質的に重視される現実がある。その中で複合的な研究アプローチを探求する動きが生じていると考えられる。2014年にフィラデルフィアで開催された AOM では、D. ティースなどが参加して大学がオープンイノベーションにおいて果たす役割について報告が行われた¹⁰⁾。オープンイノベーションに関する議論では、新産業の創出の実現、地理的な距離を越えたグローバルな結合性、中小規模企業によるイノベーションと地域の能力の活性化などが扱われている。

米国内にはイノベーションを通じたグローバルな優位性を再生する戦略を志向する研究の潮流が存在する。例えば、Ben L. Keia, Subhash C. Jain 他著、Restoring America's Global Competitiveness through Innovation, 2013では、米国のハイテク産業では、新産業の創出とイノベーションを目的とするコラボレーションのネットワークが、多様な地域に国際的に幾重にも組み込まれて実行に移されている状況について論じられている¹¹⁾。このような現象について、カリフォルニア大学のデイヴィス校の S. クロール教授他は、Organized Innovation A Blueprint for Renewing America's Prosperity, 2014の中で、境界 - 破壊的なコラボレーション (boundary breaking Collaboration) の概念を用いて表現している¹²⁾。

現在の米国の経営戦略論の文脈では、ダイナミックケイパビリティとオープンイノベーションに関する議論は、ネットワーク組織の普及を背景として、セットで行われる傾向がある。そのような“能力に基づく観点”が、先進国企業によるグローバル戦略と持続可能な繁栄、そして新興国及び途上国の企業の持続可能な開発にどのように連動しているかに焦点を当てて研究領域を拡張することを通じて、先進国市場の企業が本質的に直面する課

題に対応できると考えられる。多国籍企業によるイノベーションの戦略経営は、世界的に母国及び現地国における地域のイノベーションシステムの進化と活性化に本質的に依拠しており、長期的には戦略的な人的資源の開発育成の能力に基づくことが、その背景に存在する。

ダイナミックケイパビリティの研究は、これまでのところ新興国市場及び途上国市場の地域の持続可能な開発については包括していない面がある¹³⁾。物理的な距離を超えた地域のクラスターにおけるグローバル連携によるイノベーションと新産業の創出を前提とする時代において、企業のダイナミックケイパビリティの研究は、そのような地域のクラスターを軸に置いた持続可能な開発の問題を扱わざるを得ない。ケンブリッジ大学のC. ピティリス教授他は、この問題について、『グリーンバリュー経営への大転換 (Green Business, Green Values, and Sustainability)』, 2011の中で包括的に論じており¹⁴⁾、企業のグローバル戦略経営と地域の持続可能な開発との関係性を先端的な研究領域として位置付けている。彼はまた、D. ティースとの共著論文「国境を越えた市場の共創, ダイナミックケイパビリティ, 多国籍企業の企業家的理論」を執筆している¹⁵⁾。

この重要な問題は、さらに途上国の企業によるグローバル戦略にも関連してくる。J. カントウエルは、途上国にある企業が、多様なサプライヤーからイノベーション能力をいかに学習するかに焦点を当てている。彼の研究によれば、途上国の企業は、様々な方法及び、親会社、顧客、供給者、ジョイントベンチャーのパートナー、協力企業、研究機関など、異なる地域的或いは国際的な行為者との連携を通じて、イノベーションの実行について学習している¹⁶⁾。企業は、これらの知識の外部源泉を通じて、新しい革新的な技術能力を自らの組織に蓄積し創造することになる。

本章で論じたように、米国経営学が、複合的な問題解決を指向しながら大きな変化を遂げつつある中で、国際経営論の分野は、イノベーションの戦略経営論から影響をさらに受けるようになっていく。次章では、多国籍企業論の中にダイナミックケイパビリティ及びオープンイノベーションの視点を組み入れて、新たな展開を示しているJ. カントウエル及びR. ムダンビ他による最近の研究に基づいて考察を行い、彼らが提示する経済地理、戦略経営、イノベーションの分野を統合化する新しい視座について考察する。

Ⅲ. 多国籍企業のダイナミックケイパビリティとオープンイノベーション -J. カントウエル他研究における企業の内部から地域のクラスターへの焦点の移行-

(1) 新興国の後発企業による産業上のリーダーへのキャッチアップ戦略

本章では国際経営論の研究者として、米国 ルトガー大学のJ. カントウエル教授の研究を取り上げ、国際経営及び企業のイノベーションの戦略経営の変化に関して考察を行う。

彼は、Journal of International Business Studies の Editor in Chief を務めており、2012年の編著書、Innovative Firms in Emerging Market Countries¹⁷⁾の中で、新興国市場の企業のキャッチアップ過程におけるイノベーションのメカニズムについて解明している。2004年には、多国籍企業の立地と地域のイノベーションシステムに関連する叢書 Globalization and the Location of Firms, 2004¹⁸⁾を編纂しており、この分野での指導的な研究者である。

D. ティース教授は、国際経営の分野での初期の研究で国際的な技術移転の領域などで優れた研究成果を出した後、イノベーションの戦略経営論の分野でダイナミックケイパビリティなどの影響力のある理論を確立し、そのアイデアを国際経営の文献に戻すことによって、新たな発展の経路を切り開くことで顕著な貢献を成している¹⁹⁾。J. カントウエル他編著は、この系譜の中に位置付けることができる。J. カントウエルは、テンブル大学の R ムダンビとの共著論文の中で、多国籍企業の海外子会社が、能力活用型の段階から局地的な面で能力創造型の段階に進化することを提示し、能力創造型の海外子会社が、地域のネットワークに緊密に埋め込まれることで、地域のイノベーションシステムの進化を促進する機能を果たすことを実証的に明らかにしている²⁰⁾。

2015年に香港で開催された9th Asia Academy of Management は、「アジア新興国市場からのイノベーション及びアジア新興国市場に向けたイノベーション」をテーマに掲げており、J. カントウエル教授が Keynote Speaker として招聘されている。この大会の Call for Paper によれば、イノベーションは、新興国市場の企業と先進国市場の企業の両方に駆動されており、いずれもアジア新興国市場をイノベーションのハブとして活用している現実には焦点が当てられる²¹⁾。企業の管理者は、地域の文化的な多様性と変化の激動性に対処するため、常に挑戦的な課題に直面している。急成長を続ける東アジア及びインドなど新興国市場の企業のイノベーションについて、ダイナミックケイパビリティの視点を軸にして分析する J. カントウエル等の研究は、この分野での広範な基礎を提供している。

J. カントウエル他は、Innovative Firms in Emerging Market Countries, 2012の中で、東アジア及びインドなど新興国市場に位置する後発企業のイノベーション経営による、先進国市場の多国籍企業へのキャッチアップ過程について、国別の企業の事例分析に基づいて、歴史分析的な視点から体系的かつ理論的な洞察と将来的に関する示唆を与えている²²⁾。前掲書の特徴は、新興国のキャッチアップ企業が、グローバルな事業活動を遂行する際の企業内外にある知識の結合及び能力の構築の長期的な過程及びダイナミックな能力の再編成（ダイナミックケイパビリティ）、及び、それらのグローバルでオープンな価値連鎖との結合（オープンイノベーション）の段階的な進化について事例を基に分析している点にある。他方でそれは、米国型のイノベーションの戦略経営が世界に普及するにつれて、先進国と新興国の企業のグローバル戦略経営の差異が、次第に収斂してきている事実を示して

いる。

J. カントウェルは、以下の重要な歴史的な変化について解明している。すなわち、中国、インドなど顕著な技術的なキャッチアップを経験した国々は、先進国からの技術イノベーションのグローバルな拡散の中で、グローバル化の第2の波に関連するグローバルな結合性に大きく依存してきた。すなわちそれらの国々は、国内の産業間ネットワークを構築することに焦点を当てるのではなく、価値連鎖がさらに分解し、世界的に再配置されるにつれて、国際的な労働分業の中で専門的な地位或いは結節点を成長させている²³⁾。それはモジュラー生産の増大によるイノベーションの水平分業の飛躍的な増大を意味しており、地域のクラスターとイノベーションシステムが重要な機能を果たすことになる。

中国、インドなどの新興国市場の企業による予想を越える速度の成長は、先進国市場の多国籍企業による技術移転の戦略及び海外直接投資が契機となり、それら後発企業との国際ジョイントベンチャーや戦略提携、共同開発などが活発化したことが原因となっている。それは企業のイノベーションの戦略経営能力が向上する中で生じたが、国際ジョイントベンチャー及び戦略提携、共同開発などを通じて、企業のダイナミックケイパビリティとオープンイノベーションの実行能力が学習される過程で生じてきた²⁴⁾。適合的な国際的な企業間の関係は、国によって多様性がある。新興国市場の後発企業にとって、長期の能力蓄積の段階と共に、能力の学習と能力の再構成を通じて、ダイナミックにイノベーションを創造する能力を構築することが重要であり、一定の閾値を越えた企業が、グローバルなオープンイノベーションを実行する機会を掴むことが可能になったと考えられている。以上のように、イノベーションの戦略経営の浸透が、新興国市場の企業の発展を促進したと考えることができる。

新興国市場の後発企業による技術的なイノベーション能力は、地域を基盤としたユーザーイノベーションの手法が発展する過程で生じてきた側面があり、そこでは、ICTの柔軟な活用能力、顧客との距離の近接性に基づく知識、現場知が重要性を増大する傾向があると考えられる。そのことが最先端の経路創造的なイノベーションに繋がることになる。

D. ティースは、多国籍企業は、国家のイノベーションシステム及び地域のイノベーションシステムの多様性に依存する組織的プラットフォームを構成しており、組織的プラットフォームとは、結合された能力を引き出し、活用し、発展させるものであると論じているが²⁵⁾、それはJ. カントウェルが示す視点とも共通している。

(2) 多国籍企業におけるオープンイノベーションシステムへの移行

J. カントウェル他編著では、先進国市場の多国籍企業から新興国市場にある後発企業へのダイナミックケイパビリティに基づく技術移転の戦略に関する歴史的な分析が行われて

いる。そのような技術移転及び外部志向型の海外直接投資は、米国型のグローバル戦略経営及びイノベーションの戦略経営の普及過程の中で捉えることができる。それはオープンイノベーションの観点から理解できると同時に、日本企業が20世紀後半以降、米国企業から技術導入を積極的に行い、電機・機械など先端技術産業を確立した時期に直面した経験にも共通している。

最近の R. ムダンビによる風力発電の企業の研究によると、新興国市場の企業による研究開発の国際化が、産業上のリーダーへの全体的なキャッチアップ戦略に依存しているのに対して、先進国市場の企業の研究開発活動の国際化は、能力活用型の海外子会社の設置及び能力創造型の海外子会社の設置という2つの種類の戦略的な視点から説明することが可能である²⁶⁾。そこでの鍵概念は、ビジネスネットワークによるダイナミックな技術移転、及び、多国籍企業の統合的な能力の構築である。地理的に差異化された能力間を結びつける結合的な能力とは、多国籍企業に固有の能力と見なされ、その役割は、能力創造型の子会社の生成・成長と共に重要性を増すことになる²⁷⁾。多国籍企業は、異なる地理的な文脈から生まれる知識及びイノベーションの間の連携を促進する独自能力を保持し、それらは相乗的或いは補完的な能力のポートフォリオを構築することになる²⁸⁾。

J. カントウエル他の最近の研究によれば、ネットワーク化された多国籍企業において、中国など新興国市場に最近形成された海外子会社の中には、長期的な能力蓄積を実行することなく、積極的な能力創造を実行に移すような事例が生まれており、それらは親会社に依存することなく、内部的・外部的な知識源泉に依拠しながら多国籍企業の能力を創造している²⁹⁾。これらの海外子会社は、多国籍企業のネットワーク構造の条件下で、企業家的な面でのダイナミックケイパビリティを体现しており、オープンイノベーションからの便益を獲得することも可能になっている。そこでは、プラットフォームとしての地域のイノベーションシステムの進化の好循環を創造することが前提になってくる。

J. カントウエル他は、新興国市場の企業の最近の変化を含めて、多国籍企業におけるオープンイノベーションシステムへの移行に関する研究を歴史的な視点から行い、新たな企業形態としてのポストチャンドラーモデルの形成メカニズムを解明しようとしている。国際ビジネス活動をめぐる環境変化は、企業内及び企業間の両方において、よりオープンなネットワークの形成を促しており、イノベーションのためのオープンネットワークの普及は、企業間における境界を益々、曖昧なものに変化させている³⁰⁾。オープンな構造の特徴とは、企業の内部及び外部のネットワークが、より緊密に互いに結合されるようになることである。

ここではJ. カントウエル他の最近の研究を基にして、国際経営の領域で企業のイノベーションの戦略経営の変化がどのように生じているのかについて、ダイナミックケイパビリ

ティとオープンイノベーションの統合的な視点から考察を行った。それらは最近では能力創造型の海外子会社から生まれるリバースイノベーションの研究にも繋がり、地理的な空間及び立地が果たす重要性を高めている。

(3) 経済地理、戦略経営、イノベーションの分野の統合的な視座

J. カントウェル及び R. ムダンビは、最近の新たな研究の潮流として重要なアプローチを展開している。これは、国際ビジネス活動の立地に関して国際ビジネス、戦略経営、経済地理、イノベーションなどの専門分野を越えた研究を行おうとする考え方であり、国際ビジネス、イノベーション、戦略経営、経済地理など多様な分野のアイデアを統合化しようとする研究アプローチである³¹⁾。J. カントウェルの編著による *Location of International Business Activities, Integrating Ideas from Research in International Business, Strategic Management and Economic Geography*, 2014が刊行されており³²⁾、2014年の AOM 及び 2014年の AIB (Academy of International Business) で報告されている。

J. カントウェルは、立地、戦略経営、イノベーションの要素を統合化して研究が行われる背景として、①グローバルな都市地域或いは急成長する巨大な都市地域の周辺に近接したクラスター活動の生成或いは再活性化、②多くの大規模な多国籍企業 (MNE) 及びその事業パートナーによって管理或いは調整された価値連鎖の内部におけるグローバルな活動の拡散の増大、の2つを挙げている³³⁾。上記以外の要因としては、新興国市場など地理的な文脈の急速な変化、インターネット及び Smart Phone などの ICT の急激な進化、イノベーションを行う際の技術の複合化の進行などの要因が、新たに影響を増大させていると考えられる。R. ムダンビは、地域のクラスターがしばしば国境を越えて、益々互いに緊密に結合されており、地域のクラスターの繁栄は地域の環境に依存するのではなく、グローバルネットワークとの結合性に依拠する“新たなフラット性”を前提としたものへと変貌しつつあると指摘している³⁴⁾。

J. カントウェルは、多国籍企業が地理的に分散化する技術知識・アイデアの源泉として、立地を考える際に、“グローバルな結合性”がより重要になる理由として、3つの要因を挙げている。それらは、a) 局地化されない技術的な知識の探査が、専門化した知識の深耕に制約が生じ、製品に埋め込まれた技術的な複雑性が増大するにつれて、漸進的に増大してきたこと。b) MNC の海外子会社の単位が、技術的に遠距離にある知識ソースへの接近の潜在可能性を通して、母国 (或いは現地国) の立地の専門化する分野において、この側面から特定の役割を果たしていること。c) 内部的な知識と遠隔にある外部的な知識との結合が、価値創造の新たな領域をもたらすであろうことである³⁵⁾。彼は、MNC の知識交換メカニズムの再構成及び強化は、下位単位が、自らの企業集団内での知

識生成に際して、より創造的な役割を果たす上で本質的に重要であること、そして海外の地域に設置された創造的な子会社が、益々、境界を越えたオープンネットワークの結合性のノードを主導しつつあることなどを指摘している³⁶⁾。

国際的にネットワーク化された情報に基づく資本主義の時代が到来した結果、既に述べたように新興国市場にあるキャッチアップ企業が、外部源泉からの技術知識の吸収、能力構築及び再編成を通じて先端的な技術水準に到達する現象が生成している。他方で先進国の成熟した多国籍企業の競争優位性は、自らが経時的に結節点を越えて調整する国際的な生産ネットワーク (global production network) を新しい能力の発展を促進するような方法によって統合化する企業の能力から、益々生じるようになっている³⁷⁾。

企業が、グローバルな地域のクラスターに埋め込まれた社会的存在として機能することが存続発展の前提とされる限り、新興国市場、先進国市場の企業にとって持続可能な開発及び繁栄をめぐる課題の解決は、存続の基礎的な条件に関わるものになる。それでは多国籍企業のダイナミックケイパビリティと地域の持続可能な開発及び繁栄を考える際に、グローバルな結合性と地域のクラスターから生じる企業家的なイノベーションについて、どのように考察すべきか。グローバルな結合性の概念が、イノベーションの戦略経営論において重要性を持つ理由は、どのような全体状況の変化によるものであろうか。次章ではこれらの視点から論じることとする。

IV. 新興国市場の持続可能な開発、先進国市場の持続可能な繁栄、 グローバルな結合性

(1) イノベーションのクラスター (cluster of innovation) の考え方を中心にして

新興国市場の企業による経済活動は、イノベーションを創発する個人が持つ企業家精神に内在的に関連性を持ち、それらは地域の持続可能な開発に結び付いており、世界の地域のクラスターとの間で生じる“グローバルな結合性 (global connectedness)”を通じて、相互に学習する関係性を深めつつある。ICTを基礎とする新産業領域の駆動力として、オープンイノベーションの現象に光が当てられるのは、このような事実が背景に存在するためである。製薬産業を始めとする地球規模でのサイエンスビジネスの高度化の進展は、この流れを加速させている。それらのメカニズムを解明する研究は、カリフォルニア大学のA. サクセニアン教授による米国シリコンバレーのICT産業の集積地域の進化、新興国市場への頭脳流出、すなわち母国への頭脳還流に関する研究から始まったと考えられている。R. ムダンビは、インドのボリウッドとバンガロールのクラスターが成功した要因について、クラスター間でのグローバルな結合性の視点から分析を行っており、クラスターの再構成の過程においてネットワーク構造が果たす役割を強調している³⁸⁾。

この問題は、米国が、建国以来、海外からの移民の活躍に依拠してきたことから、米国内での移民の活動の研究に結び付けられる傾向がある。ボーングローバル企業が、地域のクラスターを苗床にして躍進する今日、企業家精神の豊かな個人が、地域のクラスターを通じてグローバルに連携することにより、世界規模のイノベーションの創造に繋がる流れが観察されており、それらはオープンイノベーションを通じて新産業の創出に結び付く潜在的な可能性がある。新興国市場発のハイテク・ボーングローバル企業の発展は、地域の持続可能な開発に多大な貢献をもたらし続けている。

イノベーションのクラスターとグローバルな結合性について新たな統合的な視座から捉えた研究文献として、カリフォルニア大学のアスピンブラスケールのJ.S. エンゲル教授編著による *Global Clusters of Innovation –Entrepreneurial Engines of Economic Growth around the World, 2014*³⁹⁾ を挙げることができる。J.S. エンゲルによれば、イノベーションのクラスター (Cluster of Innovation) とは、新技術が驚くべき比率で生み出されるグローバルな経済発展の源泉となる活性化した場所であり、資本、専門家、才能のプールが、新産業とビジネスの新たな方法の展開を促進するような場所を示す概念である⁴⁰⁾。それは高度にイノベティブなクラスターが、高成長企業の継続的な生成をいかに支援するかを説明する概念であり、例えばバイオ創薬の企業が、米国のシリコンバレーにおいて連続的に生成するメカニズムを説明することができる⁴¹⁾。J.S. エンゲルは、グローバルな紐帯 (global ties) の存在を重要な要因として挙げている⁴²⁾。

D. ティースは、前掲書の序文でイノベーションのグローバルクラスターとは、競争と協力を同時に遂行する相互に結合した企業の集積であり、地域のハイテククラスターから生まれる多様な背景と専門性を持った企業家による新規創業企業の経営が、経済成長に貢献する重要性を指摘した上で、ダイナミックケイパビリティの理論的な枠組みが新たな可能性を持つと論じている⁴³⁾。真に成功したイノベーションのグローバル・クラスターは、増分的というよりは急進的なイノベーションを志向した世界規模の企業の活動と連携していると考察を結んでいる。

R. ムダンビ & M. ローレンツェンは、インドのバンガロールにあるソフトウェア産業のクラスター及びムンバイにある映画産業のクラスターのボリウッドに関する事例分析の結果、新興市場経済の下では、脱-集権化した経路によってグローバル経済と連携したクラスターは、関連する産業及び技術をめぐる徹底したキャッチアップを実現する潜在的な可能性を持つことを示した⁴⁴⁾。すなわち地域の産業は、グローバルな結合性を通じて、地球的な生産及びイノベーションシステムに繋がることを可能にしており、連携のネットワーク構造がその実現性を決定付けている⁴⁵⁾。すなわち分散化したネットワーク構造が、イノベーション及びキャッチアップのための良い機会を提供することになる⁴⁶⁾。

先進国市場にある地域のクラスターと新興国市場にある地域のクラスターは、相互に学習する関係性を進化させており、グローバルな事業展開を行う企業には、先進国市場の持続可能な繁栄が、新興国市場の持続可能な開発に連動して相互に好循環を描くコラボレティブなイノベーションの戦略経営を実行することが要請される。すなわちグローバルな価値連鎖の創造とローカルな価値連鎖の創造のバランスを制御する戦略の設計について考察することが必要になると考えられる⁴⁷⁾。

経済地理学、戦略経営、イノベーションなどの分野を統合的に研究する上で、オープンイノベーションの枠組みを援用することは、有効性を持つと考えられる。この問題について、慶應大学の浅川和宏教授は、H. チェスブロー他編著、New Frontiers in Open Innovation, 2014の中で、グローバル研究開発の研究が、立地の意思決定、距離及び地理的な範囲、海外子会社の役割、グローバルオープンイノベーション、内供的及び外部的なネットワークを管理する組織能力、さらに新興国でのオープンイノベーションの管理などの分析レベルに拡張できる、と指摘している⁴⁸⁾。オープンイノベーションが、俯瞰的な視座を持ち、その特質を活かして新たな領域で応用される可能性は重要であり、多国籍企業のダイナミックケイパビリティの高度化に対応するICTの進化に適合した新たな研究アプローチとして発展する方向性を包含している。このような視座は、新興国の持続可能な開発及び先進国と持続可能な繁栄をイノベーションシステムの連携の中で俯瞰的に理解することを可能にするものと考えられる。ここで強調する必要があるのは、企業の最高経営層がグローバルな戦略経営の遂行の際に地域のクラスターの間で生じる“グローバルな結合性”を柔軟に適切に管理することであり、技術変化を含めた偶発的な変化を戦略上の変化に再編成するための能力、すなわちダイナミックケイパビリティを高めることである。

そのような事例として、米国のシリコンバレー発の新たなイノベーションの潮流として生成しているモノのインターネット化 (Internet of Things) の現象を挙げることができる。スマートフォンを始めとする新たなデバイスが、製品・装置のユーザビリティを劇的に向上させていることが背景に存在する。M. ポーター他は「IoT時代の競争戦略」の中で、接続機能を持つスマート製品の出現の結果、システムの複合体としての性能が重要になり、業界間で新しい境界が生じると推測している⁴⁹⁾。それは事業領域の拡大と複合的なエコシステムを創造することになる。IoTは、製品の機能性及び性能の段階的な向上のみならず、顧客ニーズへの対応力を劇的に高めることで、エネルギー、水、原材料などの資源を保護しつつも、製品の効用、安全性、信頼性を向上させると考えられている⁵⁰⁾。それにより米国のシリコンバレーなどICT分野のクラスターの企業に、インテルなどが獲得した技術的なリーダーシップの恩恵が、もたらされる可能性がある。これはオープンイノベーションを通じて地域のクラスター間でグローバルな結合性をもたらされる事例であ

り、イノベーションのクラスターの視点からの説明が有効であると考えられる。

先進国と新興国との共同の面に着目するならば、2012年頃より先進国のドイツ企業、米国企業を中心にしてインドなどの新興国市場を巻き込んで進行しているインダストリー4.0、工場のスマート化の動きは、デジタル技術に依拠しながら効率性を高め、企業の進化的な統合能力、すなわちダイナミックケイパビリティを劇的に高めると同時に、工場のネットワーク化により立地をめぐる物理的距離の制約の克服を目的としている⁵¹⁾。それにより、個別の顧客への対応能力の飛躍的な増大、個別製品からの収益性の拡大、意思決定の最適化、さらには仕事の柔軟組織化によるライフワークバランスの促進などが期待されている。これを支える基盤技術が、IoT（接続機能を持つスマート製品）、ロボット、3Dプリンターになると考えられている。

製造業の基盤整備を課題とするインドは、自国の強みであるICTを生かしてIoTを組み込んだ製造システムを進化させる試みを実現しており、例えばTech-Mahindra社などでは、IoTによる技術融合を通じて、スマートフォンで操作可能な電気自動車の開発及び生産を開始している⁵²⁾。このようにIoTの技術は、世界に分散化した高度技術のクラスターとのグローバルな結合性を通じて、新興国市場の企業の優位性を活用する梃子として機能することが期待されている。

他方で米国、日本を含めた先進国市場の企業が推進している先端的な製造工場の国内への回帰の動きは、イノベーションの源泉となる知識の集積体としての工場を地域のクラスター再生の原動力として再編成しようとするグローバル戦略の一部として捉えられる。米国では、政府の支援策として、先進製造業を支援する産学官連携の枠組みである先進製造業パートナーシップ（Advanced Manufacturing Partnership）が、本格化に始動しており⁵³⁾、先進製造業の促進がオハイオ州に開設された3次元（3D）生産技術の研究拠点などが、注目されている。これらの動きは、本章で示した新たな統合的視座に依拠することにより、メカニズムの解明が可能である。また最先端技術を保持する日本の地域の中小規模企業が、シリコンバレーを始めとする世界のクラスターとの間でグローバルな結合性を獲得するための政策的支援の実行なども、この問題に関連している。

このように、経済地理、戦略経営、イノベーションの分野の統合的視座は、グローバルな価値連鎖の短縮化がもたらす効率性と創造性、企業のグローバルなイノベーションの戦略経営に与えるインパクトについて扱うことを可能にする。先進国市場の企業の立場からは、グローバルな価値連鎖の創造と地域的な価値連鎖の創造を統合化してバランスを図るグローバル戦略経営を設計して実行する必要があると考えられる。

Rob Van Tulder, Alan Verbeke, Roger Strange は、European International Business Academy（EIBA）が編纂したInternational Business and Sustainable Development, 2013の第47号（2015）

序章「持続可能性への新たな経路の探求：複雑性の評価」の中で、ミクロ・マクロ・メゾの多層的な企業戦略の在り方に関して考察しており⁵⁴⁾、ダイナミックケイパビリティの新たな展開に際して示唆的である。

(2) 企業のグローバル戦略経営への実践的な含意

本章でこれまで論じてきたことは、日本企業の戦略アーキテクチャーにとって重要な意味を持つ。ここでは、グローバル戦略経営への実践的な含意について論じたい。アジア新興国市場と欧米先進国市場との結節点に位置する日本企業においては、先進国市場の地域のクラスターの再活性化と新興国市場の地域の持続可能な開発を担うイノベーションをグローバルな結合性を通じて連携させることで、多様な地域コミュニティにあるユーザーイノベーションを活用する優位性を獲得することが可能であり、それにより包括的な経済発展の持続可能性に貢献する戦略を探求することができる。それらは大規模な複合事業企業に限定されるものではなく、環境・医療・教育などのハイテク分野における地域発のグローバルニッチトップ企業⁵⁵⁾による地球規模でのリバースイノベーションの先行的な実現を考える際にも適用することが可能である。

先進国市場の企業が、炭素隔離、分散型発電、海水淡水化、医療機器など、複合技術領域でのリバースイノベーションを実現化するには、新興国市場と先進国市場のクラスターの間でのグローバルな結合性の管理が重要な課題であり⁵⁶⁾、それにより、収益性のある巨大な市場を獲得することができる。新興国市場に設置された能力創造型の海外子会社が形成するダイナミックケイパビリティと地域のクラスターの進化は、先進国市場の地域のクラスターで要請される新たな次元のユーザーイノベーションの仕組みと同型性を保持するものと理解できる。

J. カントウェル他編著では、新興国市場の急速な発展を支える多国籍企業によるダイナミックケイパビリティの進化的な展開、国際的な技術移転及び海外直接投資がもたらす地域能力と価値連鎖の創造について詳細な分析と検討が行われた。しかしながら国家よりも地域を主軸とする地理的な空間において、企業家的なイノベーション活動が活発化する現在において、先進国市場に埋め込まれた地域のイノベーションのクラスターの再生に焦点を当てたケイパビリティの再構築の過程に焦点を当てる必要がある。ハーバード大学のG. ピサノ教授は、強い産業上のコモنزに企業が属することの戦略的価値の重要性について指摘している⁵⁷⁾。そのことは、グローバルな価値連鎖の創造とローカルな価値連鎖の創造の均衡化を図るダイナミックケイパビリティを探求することを意味する。

オープンイノベーションの観点からは、地域のクラスターで活躍する企業家精神の豊かな個人や組織を連携する“グローバルな結合性”を理解する上で、有効であると考えられる。

それにより、新興国市場での持続可能な開発と先進国市場での持続可能な繁栄とを両立させる視点を提供することが可能になる。多国籍企業は、R. ムダンビの言う国境を越えた複合立地型企業（Multi-locational Enterprise）⁵⁸⁾として、“グローバルな結合性”を活用することでグローバルな戦略経営を実行に移し、先進国市場の持続可能な繁栄と新興国市場の持続可能な開発とのバランスを制御するような戦略のアーキテクチャーを俯瞰的な視座から描くことが要請されると考えられる。多国籍企業の最高経営層には、先進国市場及び新興国市場の各々に埋め込まれた地域のイノベーションシステムの進化を促すことを視野に入れて、それらの同型性の間で均衡を図るような戦略思考及び行動原理を醸成することが求められる。そのことが、新興国市場の持続可能な開発と先進国市場の持続可能な繁栄を両立させる根本的な問題解決を導く鍵になると考えられる。

本稿で論じたように、国際経営論の領域にはイノベーションの戦略経営論が浸透する傾向を増しており、そこでは経済地理、イノベーション、戦略経営などの複合的なアプローチによる研究が発展を見せている。多国籍企業によるイノベーションについて経済地理との関連で研究された文献として、Simona Iammarino & Philip McCann 著、Multinationals and Economic Geography –Location, Technology and Innovation–, 2013⁵⁹⁾、企業家精神とイノベーション政策との関連の文献として、David B. Audretsch, Mary Lindenstein 編著、Creating Competitiveness –Entrepreneurship and Innovation Policy for Growth–, 2013⁶⁰⁾を挙げることができる。

V. むすびにかえて

本稿では、米国経営学におけるダイナミックケイパビリティの視点から多国籍企業のイノベーションの戦略経営の変化について考察することを目的として、第Ⅱ章では、米国経営学が複合的な問題解決を指向して変化しており、国際経営論の分野で現在生じている変化が、ダイナミックケイパビリティの概念を中心にしてイノベーションの戦略経営論が浸透する過程であることを論じた。第Ⅲ章では、J. カントウエル、R. ムダンビなどの先進国市場と新興国市場の企業によるイノベーション経営の研究に関する考察を行い、グローバル戦略経営の視点から新しい研究の潮流として、経済地理、イノベーション、戦略経営の分野のアイデアを統合するアプローチについて検討した。第Ⅳ章では、その中で最近注目されている J.S. エンゲルが提唱したクラスターのイノベーション（cluster of innovation）の考え方を中心にして議論を展開した。

本稿で論じたように、ダイナミックケイパビリティの理論は、新興市場国の地域の持続可能な開発を実現する上で必要な企業の駆動力について説明すると同時に、先進国市場に

おける地域の持続可能な繁栄を実現する均衡的な能力を説明することが可能であり、それら結びつけるグローバルな結合性の戦略的管理を扱うことができると考えられる。企業家的な行動を重視するイノベティブな多国籍企業は、地域のイノベーションシステムの間のグローバルな結合性を戦略的に管理する主体として把握されるべきであり、政策的な視点から分析することが必要になる。

地域の持続可能な開発及び繁栄の課題は、地球規模においてグローバルに連携する傾向を見せており、これらの課題について企業のグローバル戦略の視点からダイナミックケイパビリティとオープンイノベーションの理論的枠組みに依拠して検討することが必要になる。国際経営論の領域にイノベーションの戦略経営論が、浸透する過程は、さらに加速するものと考えられる。

グローバルなイノベーションの戦略経営の視点から見ると、ユーザーイノベーションの進化が最近の大きな鍵であり、クラウド技術など ICT の地球的な規模での普及に伴い、新たな次元で“イノベーションの民主化” (democratizing Innovation) が進展する状況が生成している⁶¹⁾。ICT の進化が、地域のクラスター間でのグローバルな結合性を促進することで、サイエンスビジネスと関連する領域を超えた複合的なイノベーションが生じる可能性はさらに高まり、企業組織、非営利組織、非政府組織の間での統治とプラットフォームのオープン化 (Opening Governance) は、根本的な機会として認識されつつある⁶²⁾。米国のシリコンバレー発の Internet of Things (IoT)、M. ポーターが重要な概念として指摘する「接続機能を持つスマート製品」、3D プリンターの普及などは、これらの流れを加速する最近の事象として理解できる。それらは長期的な視野に立ったイノベーション、持続可能な繁栄に寄与すると予測されている。先進国のドイツ、米国を中心に新興国を組み入れながら進行しているインダストリー4.0の構想などは、これらの動きと連動する注目すべき変化であり、ダイナミックケイパビリティの新たな潮流と方向性を象徴するものと考えられる。

註

- 1) Academy of Management の年次大会のテーマ (All Academy Theme) については、各年度の AOM のプログラムを参照のこと。 <http://aom.org/Meetings/Past-Meetings/>
- 2) Ram Mudambi, Tim Swift, Leveraging knowledge and competencies across space: The next frontier in international business, *Journal of International Management*, 17, 2011, p.186.
- 3) Ibid, p.189.
- 4) A.D.Chandler,JR., P.Hagstrom, Orjan Solvell, *The Dynamic Firm –The Role of Technology, Strategy, Organization, and Regions*, Oxford Univ.Press, 1999.
- 5) Peter Hagstrom with Alfred D. Chandler, JR., *Perspectives on Firm Dynamics*, in

- A.D.Chandler,JR., P.Hagstrom, Orjan Solvell, *The Dynamic Firm –The Role of Technology, Strategy, Organization, and Regions*, Oxford Univ.Press, 1999, pp.1-12.
- 6) Henry Chesbrough, and Marcel Bogers, *Explicating Open Innovation –clarifying an Emerging Paradigm for Understanding Innovation-*, In Henry Chesbrough, Wim Vanhaverke, & Joel West (eds.), *New Frontiers in Open Innovation*, Oxford Univ. Press, 2014, pp.3-14.
- 7) Joe Tidd and John Bessant, *Strategic Innovation Management*, Wiley, 2014, p.14.
- 8) Allan Afuah, *Business Model Innovation, Concept, Analysis, and Cases*, Routledge, 2014, p.3-21.
- 9) Deepak Somaya, David Teece, Simon Wakeman, *Innovation in multi-invention contexts: Mapping solutions to technological and intellectual property complexity*, *California Management Review*, No.53, 4, 2011, pp.47-79.
- 10) 2014年にフィラデルフィアで開催のAOMでは、Open Innovationに関する6つのセッションが行われている。D ティースは、What University Structures and Values Assist in Creating Innovation Ecosystems? というテーマで、大学が Open Innovation において果たす役割について報告を行っている。
- 11) Ben L. Kedia and Scott E. Motty, *Learning and Innovation in Collaborative Innovation Networks*, In Ben L.Keia, Subhash C.Jain (eds.), *Restoring America's Global Competitiveness through Innovation*, Edgar Elgar, 2013, pp.3-27.
- 12) Steven C. Currall, Ed Fraunheim, Sara Jansen Perry, Emily M.Hunter, *Organized Innovation A Blueprint for Renewing America's Prosperity*, Oxford Univ. Press, 2014, pp.83-97.
- 13) ダイナミックケイパビリティ論に基づく多国籍企業の企業家的理論について概説している、D. ティース著の以下の文献を参照のこと。
David Teece, *A dynamic capabilities-based entrepreneurial theory of the multinational enterprise*, *Journal of International Business Studies*, 45, 2014, pp.8-37.
- 14) Christos N. Pitelis, Jack Keenan, Vicky Pryce (eds.), *Green Business, Green Values, and Sustainability*, Routledge, 2011. (谷口和弘訳『グリーンバリュー経営への大転換』NTT 出版, 2013.
例えば、第1章 経済的持続可能性とガバナンス、第11章 持続可能な経済特区 –行動のきっかけ–を参照のこと。
- 15) Christos N.Pitelis & David J.Teece,“Cross-border Market co-creation,dynamic capabilities and the entrepreneurial theory of the multinational enterprise”, *Industrial and Corporate Change*, Oxford University Press, vol.19 (4), 2010, pp.1247-1270.
- 16) Jahan Ara Peerally, John Cantwell, *The Effect of Trade Policy Regimes on Firm's Learning From Suppliers How to Innovate*, In Alexander Brem, Joe Tidd (eds.), *Perspectives on Supplier Innovation: Theories, Concepts and Empirical Insights on Open Innovation and the Integration of Suppliers*: 18 (Series on Technology Management), World Scientific, 2012, pp.205-206.
- 17) Edmund Armann, John Cantwell (eds.), *Innovative Firms in Emerging Market Countries*, Oxford University Press, 2012.
- 18) John Cantwell, *Globalization and the Location of Firms*, Edward Elgar, 2004.
- 19) John Cantwell, *Revisiting international business theory: A capabilities-based theory of the*

- MNE, *Journal of International Business Studies*, 45, 2014, pp.1-2.
- 20) John A. Cantwell, Ram Mudambi, "Physical Attraction and the Geography of Knowledge Sourcing in Multinational Enterprises", *Global Strategy Journal*, No.1, 2011, pp.206-207.
- 21) 以下の 9th Asia Academy of Management に関する Call for Papers を参照のこと。 http://www.bschoo.cuhk.edu.hk/asia-aom/conference/Call_AAOM_15.pdf
- 22) 拙稿「多国籍企業のイノベーション経営と持続可能な開発」東海大学紀要政治経済学部第45号, 2013を参照のこと。
- 23) John Cantwell, The Role of International Business in the Global Spread of Technological Innovation, in Yama Temouri, Chris Jones (eds.) *International Business and Institutions After the Financial Crisis*, Palgrave Macmillan, 2014, pp.27-28.
- 24) Edmund Armann, John Cantwell (eds.), op.cit., 2012, pp.75-80.
- 25) John Cantwell, Revisiting international business theory: A capabilities-based theory of the MNE, *Journal of International Business Studies*, 45, 2014, p.3.
- 26) Snehal Awate, Marcus M Larsen and Ram Mudambi, Accessing vs sourcing knowledge : A comparative study of R&D internationalization between emerging and advanced economy firms, *Journal of International Business Studies* (2014), 46, p.63.
- 27) John Cantwell & Ram Mudambi, MNE competence-creating subsidiary mandates. *Strategic Management Journal*, 2005, 26 (12): 1109-1128.
- 28) John Cantwell Location and the multinational enterprise, *Journal of International Business Studies*, 2009, 40 (1): 35-41.
- 29) Feng Zhang, John A Cantwell and Guohua Jiang, The competence creation of recently-formed subsidiaries in networked multinational corporations: Comparing subsidiaries in China and subsidiaries in industrialized countries, *Asian Business & Management*, Vol.13, 2014, pp 5 -6.
- 30) Blurred Boundaries between Firms, and New Boundaries within (Large Multinational) Firms: The Impact of Decentralized Networks for Innovation, *Seoul Journal of Economics*, Vol. 26, No. 1, 2013, pp.1-2.
- 31) 第 3 章で取り上げた, A.D. チャンドラー他編『The Dynamic Firm -The Role of Technology, Strategy, Organization, and Regions』1999 を構成していた, 1. 技術, 2. 戦略, 3. 地域の各パースペクティブを統合化するアプローチとして理解することができる。
- 32) John Cantwell (eds.), *Location of International Business Activities, Integrating Ideas from Research in International Business, Strategic Management and Economic Geography*, 2014.
- 33) Ibid, p.1.
- 34) Ram Mudambi, Flatness : The global disaggregation of value creation, in Gary Cook, Jennifer Johns (eds.), *The Changing Geography of International Business*, Palgrave Macmillan, 2013, pp.13-16.
- 35) 2014年のAIBでのJ. カントウエルの講演のスライドを参照のこと。
AIB 2014 Recorded Session Video, Session 2.2.1 - Global Connectivity as the Basis for Local Innovation.
<http://aib.msu.edu/events/2014/videos/ShowSessionVideo.asp?videoid=58>
- 36) 同じく, 2014年のAIBでのJ. カントウエルの講演のスライドを参照のこと。

<http://aib.msu.edu/events/2014/videos/ShowSessionVideo.asp?videoid=58>

- 37) John Cantwell, The Role of International Business in the Global Spread of Technological Innovation, in Yama Temouri, Chris Jones (eds.) International Business and Institutions After the Financial Crisis, Palgrave Macmillan, 2014, pp.33-34.
- 38) Mark Lorenzen and Ram Mudambi, Clusters, Connectivity and Catch-up: Bollywood and Bangalore in the Global Economy, Journal of Economic Geography Advance Access published July 25, 2012, pp.1-34.
- 39) Jerome S. Engel (eds.), Global Clusters of Innovation –Entrepreneurial Engines of Economic Growth around the World, Edward Elgar, 2014.
- 40) Jerome S. Engel, Global Clusters of Innovation: Lessons from Silicon Valley, California Management Review, Vol.57, No.2 (Winter 2015), p.37.
- 41) Ibid, p.37.
- 42) Ibid, p.45.
- 43) Jerome S. Engel (eds.), Global Clusters of Innovation –Entrepreneurial Engines of Economic Growth around the World, Edward Elgar, 2014, pp.xvii-xix.
- 44) Mark Lorenzen and Ram Mudambi, , op.cit.,2013,pp.1.
- 45) Ibid, p.2.
- 46) Ibid, pp.4-6.
- 47) 以下の R. ムダンビ他著の論文では、戦略的なモジュラー性という概念を用いて、この問題に言及しようとしている。
Gerald Mcdermott, Ram Mudambi, and Ronaldo Parente, “Strategic Modularity and The Architecture of Multinational Firm”, Global Strategy Journal, 3, 2013, pp.4-6.
- 48) Kazuhiro Asakawa,Jaeyong Song,and Sang-Ji Kim,Open Innovation in Multinational Corporations –New Insight from the Global R&D Research Stream,, In Henry Chesbrough, Wim Vanhaverke, & Joel West (eds.), New Frontiers in Open Innovation, Oxford Univ. Press, 2014, pp. 168.
- 49) Micheal Porter, James E. Heppelmann, How Smart Connected Products Are Transforming Competition, HBR, November,2014, 邦訳「接続機能を持つスマート製品が変える IOT 時代の競争戦略」, DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー, 2015年4月号, ダイヤモンド社, pp.44-54.
- 50) Ibid, p.69.
- 51) ドイツの政府と企業が主導するインダストリー4.0の概要については、以下の文献を参照のこと。
Securing the future of German manufacturing industry Recommendations for implementing the strategic initiative INDUSTRIE 4.0 Final report of the Industrie 4.0 Working Group April 2014, pp.5-7.
www.platform-i40.de/sites/default/files/Report_Industrie%204.0_engl_1.pdf
- 52) インドでのインダストリー4.0の調査レポートに関しては、以下を参照のこと。
日経ビジネス編集『まるわかりインダストリー4.0 - 第4次産業革命 - (日経 BP ムック 日経ビジネス)』, 日経 BP 社, 2015, 26-29頁,
- 53) 西川珠子著「米国産業構造の変化 –マクロ経済統計に見る「製造業復活」の実態–」み

ずほ総研論集, 2013年Ⅱ号, pp.25-28.

The White House, FACT SHEET: President Obama Announces New Actions to Further Strengthen U.S. Manufacturing

<http://www.whitehouse.gov/the-press-office/2014/10/27/fact-sheet-president-obama-announces-new-actions-further-strengthen-us-m>

- 54) Rob Van Tulder, Alan Verbeke, Roger Strange, Taking Stock of Complexity: In Search of New Pathways to Sustainable Development, in Rob Van Tulder, Alan Verbeke, Roger Strange (eds.), International Business and Sustainable Development, 2014, pp.2-8.

- 55) 細谷祐二著『グローバル・ニッチトップ企業論－日本の明日を拓くものづくり中小企業』, 白桃書房, 2014.

ニッチトップ型企業とは、競争力の高い独自製品を有する独立性の高いものづくり中小中堅企業のことを指している。この文献では、そのような企業の国際的な展開を支援する政策に関しても論じられている。

- 56) Irene J.Petrick and Suwan Juntiwassarakij, The Rise of The Rest: Hotbeds of Innovation in Emerging Markets, Research Technology Management, July-August, 2011, pp.24-29.

- 57) Gary P. Pisano, Willy C. Shih, Producing Prosperity : Why America Needs a Manufacturing Renaissance, Harvard Business Review Press, 2012, PP.101-118.

G. ピサノは、D. ティースとのダイナミックケイパビリティに関する以下の論文の共著者である。

David J.Teece, Gary Pisano, Amy Shue, Dynamic Capabilities and Strategic Management, Strategic Management Journal, Vol.18: 7, 1997.

- 58) Sjoerd Beugelsdijk and Ram Mudambi, MNEs as Border-Crossing Multi-location Enterprises: The Role of Discontinuities in Geographic Space, in John Cantwell (eds.) Location of International Business Activities, Integrating Ideas from Research in International Business, Strategic Management and Economic Geography, Palgrave Macmillan, 2014, pp.413-414.

- 59) Simona Iammarino & Philip McCann, Multinationals and Economic Geography –Location, Technology and Innovation–, Edward Elgar, 2013.

- 60) David B.Audretsch, Mary Lindenstein (eds.), Creating Competitiveness –Entrepreneurship and Innovation Policy for Growth–, Edward Elgar, 2013.

- 61) Eric Von Hippel, Democratizing Innovation, The MIT Press, 2006.

- 62) 2015年にバンクーバーで開催のAOMのテーマ Opening Governance を参照のこと。

<http://aom.org/annualmeeting/2015/theme/>